



Title	和歌における「あさぼらけ」と「あけぼの」の差違について : 新古今期までを中心に
Author(s)	篠原, 美夏
Citation	詞林. 2022, 72, p. 22-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌における「あさぼらけ」と「あけぼの」の差違について

— 新古今期までを中心に —

篠原 美夏

一、問題の所在

朝の時間帯を表す表現・言葉は多く存在していたが、現在では衰退した語や意味が変容した語もあり、古典文学においては解釈の注意が必要である。朝の時間帯を表す語の中でも、「あさぼらけ」と「あけぼの」は特に意味が近いと考えられ、『歌ことば歌枕大辞典』では両語に同じ語釈がつけられている¹⁾。しかし、同時期にこの二語が使われており、古典文学において一方が完全に衰退するような現象も確認できないため、何かしらの違いや使い分けが存在したと考える方が自然である。

両語の違いに対して、先行する研究では時間的差違が考えられていた。「あさぼらけ」と「あけぼの」の違いに着目した論の嚆矢は、石田穰二氏の「「あけぼの」と「朝ぼらけ」」である。石田氏は『源氏物語』の用例の検討を通して、「あさぼらけ」は「時刻は日の出前後であり、夜が明けた」と既

に言へる刻限」(三頁)であると述べた。また、「時刻から言へば、「あけぼの」の方が「朝ぼらけ」より早く、明るさから言へば、「あけぼの」の方が暗い。」(四頁)と、「あけぼの」↓「あさぼらけ」の時間的順序があると指摘した。この結論は『角川古語大辞典』「あさぼらけ」項や「あけぼの」項にも受け継がれている²⁾。しかし、一つの物語中の用例しか検討していないにもかかわらず、この結論が語の全体に適用されている点は問題である。もちろん、ある文学作品の中で意図的に使い分けられている可能性はあるが、それはその作品における特色であり、語全体が持つ語義の性質とは異なる。

吉海直人氏³⁾は石田論も踏まえつつ、両語の他に「しのめ」や「暁」についても検討を加え、「和歌と詞書の調査によって、時間表現が意外に重なっていることが明らかになった。こうなると時間表現を時間軸に沿って順番に並べることはできそうもない。むしろ横並びにして、その重なりを考えるべきである。」(一五七頁)と、これらの語には単純な前後関係は認

められないという新たな視点を提示した。⁵⁾吉海氏が「重なり」とするのは、一首に二つ（以上）の時間表現語が用いられるか、次に挙げるような詞書と和歌に別の時間表現語が用いられる形である。

むま、あせにてまたあかつきにおるれば、すすきに
むすびつけて、⁶⁾

花すすきあさぼらけこそこひしけれうちそよめきてわか
れつるけさ
〔大齋院前御集〕二〇一番歌

後述するように時間的順序が認められないという点は私見と重なるが、吉海論の根拠となる歌の解釈や検討方法には課題が残る。例えば『赤染衛門集』三五一番歌「朝ぼらけ萩を上くと見えつるはかせぎの近く立てるなりけり」⁷⁾について、

「かせぎ」（鹿）は見えたのではなく鳴き声を聞いたのではないだろうか（一五四頁）と述べ、自身の論に都合が良いようにこの歌の視覚性を曲解している。また、四語（十有明）の検討をまとめて行い、語の「重なり」の提示に集中したことで、その語同士がどのような点に違いを持つのかまでは言及できていない。加えて、周辺の他の語を仲介して語義を比較検討することにも危険性がある。ある時間表現語の語義を考える際に、別の時間表現語を判断の根拠として挙げることは信頼に欠けるだろう。同じく時間帯を表す語であるにもかかわらず、一方は通例の語義を疑い、もう一方では無批判に受け入れてしまうと、語に対する態度が矛盾するからである。

また、根拠とした語のうちどれか一つでも解釈が変われば、その語を根拠に用いた複数の論の修正が必要となる恐れがある。他の時間表現語を経由せずに、対象となる語の違いを明らかにしなければならぬ。

以上のように、これまでの「あさぼらけ」「あけぼの」に関する研究では、根拠の量や解釈に問題が生じていた。

また、語義の面で違いがわからない・存在しないのであれば、別の面から語の違いを検討する必要がある。本稿では、細かな時間帯の差という語義の観点ではなく、資料中でのように使われているかに着目し、用法や運用の問題として、両語の差違を考える。

二、時間的順序に関して

まず、従来の研究で検討されてきた両語の時間的順序について、改めてその内容を確認する。時間的順序を主張する根拠となった用例の再検討は小林賢章氏が行っている。⁸⁾小林氏は、石田氏や徳原茂実氏の論で取り上げられた用例について改めて検討を行い、「あさぼらけ」は「原則暗い時間帯である」と、両氏とは異なる結論を導き出した。また、「明く」という語について、「夜が明ける」と「日付が変わる（日付変更線である午前三時（寅の刻）を過ぎる）」の二通りの意味があると指摘し、石田氏が「明く」を全て「夜が明ける」という意味に限定した点を結論の相違の原因であると示した。論点

が広がりすぎてしまうため、本稿では「明く」の語義に関する検討は行わない。ただし、小林氏が自身の「明く」論や他の時間表現語の論に囚われるあまり、視覚性の観点において矛盾した解釈を提示していることは指摘できる。例えば、石田氏が「その時刻を明示するに足ると思はれる用例」として挙げていた次の用例について、小林氏は直前の「夜もすがら」に注目する一方で、「霞の間より見えたる花の色々」という視覚性を無視している。「花の色々」が見えるのであれば、ある程度の明るさは存在するとも考えられるだろう。

夜もすがら、尊きことにうちあはせたる鼓の声絶えずおもしろし。ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ、なほ春に心とまりぬべくにほひわたりて、百千鳥の囀りも笛の音に劣らぬ心地して、ものあはれもおもしろさも残らぬほどに、

（『源氏物語』御法、④四九七頁¹¹）

そして、小林論の一番の問題は、時間単位で時間表現を区別していることである。前掲論文の中では、たとえば「アシタは午前三時以降、ツトメテは午前五時以降」（一五五頁）「アカツキ（午前三時～午前五時）」（一五四頁）と述べられている。だが、果たして、平安人は明確な時刻の区切りによって言葉を使い分けていたのだろうか。確かに平安時代は漏刻が整備され、時奏があり、定時制がとられていた。内裏に近い所であれば時奏の音や声が聞こえただろう。しかし、歌を詠

む際に意識されたのは、画一的な時刻の区切りよりも、過去の詠歌や散文作品における用法ではないだろうか。現代のよいうな時計が無い中で、数十分～一時間程度と短い薄明の時間（薄明以前の暗い時間を含めてもそれほど長くない）を時刻によって複数の語で使い分けていたとも考えにくい。ある一点の時刻で時間表現が明確に切り替わっていたと考えるよりも、それぞれの語義は一部、もしくは全部が重なり合っており、用法の観点で使い分けられていたと考える方が自然だろう。

また、石田氏と同じく『源氏物語』の用例を検討した伊藤夏穂氏は、「あさぼらけ」は「時間軸上では「曙」の前に位置し、空間的には夜明けのほの暗さを残しつつ霧などに覆われたおぼろげな状態を表す。」（一五頁）とし、石田氏とは反対の時間的順序を主張する。先に引いた御法巻における「あさぼらけ」の用例についても、伊藤氏と石田氏は異なる見解を示す。石田氏は「さへづりと形容される程になるのは、既に相当明るくなつてからであるとは、平野宜紀教授の御教示であった。空は既に青色を取り戻してゐる頃であらう。」（三頁）と明るい状態であると解釈し、対して伊藤氏は「「ほのぼのと」と繰り返して形容され、ほのかな明度のほんやりとした状態にある」（一三頁）と薄暗い時間帯であると述べる。同じ用例を見ても論者によって解釈が変わり、「あさぼらけ」と「あけぼの」の時間的順序が異なっている。なお、新古今

期頃までを概観した時に、「音」や「声」という語が和歌中に現れる数・割合は両語間に大きな差は無い（むしろ「あけぼの」の方がやや多い）。「ほのほのと」についても、別途調査したうえで明度を判断すべきと考えられるが、伊藤論にその言及はない。

先行論で述べられた両語の時間的順序について、根拠や検討過程に問題があることが確認できた。特に、時間的順序の存在が前提となっていた点と、用例検討範囲の狭さである。

三、両語の同時性・用法に着目して

本稿では新古今期¹³を下限として用例の調査結果を提示する。『新編国歌大観』に収録されている『新続古今和歌集』までの全歌を対象に調査を行ったが、新古今期より後の時期には目立った特徴が見られなかったためである。また、用例調査対象範囲は和歌に絞った。和歌は文字（音節）数が固定されているため、字数の違う両語の間で差が見られやすい項目ではないかと考えたためである。散文であれば字数や修飾関係などに制限はないため自由に配置できる上に、和歌ほどまとまった用例が無いいため、今回の比較検討には適さないと判断した。

本節では、両語に時間的順序が存在しないことを示す。まず、両語が同じ場面で使われている例として、『夜の寝覚』中の用例を挙げる。

なにの折も、世とともに嘆かしかりつる年ごろの、この曙は恋しきことぞ、返るらむ波よりもしげきや。

寝覚の上 朝ぼらけ憂き身かすみにまがひつついくたび

春の花を見つらむ 「中略」

宰相の上 いつとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに交

はらぬ春の曙 （巻四・三四八頁）

地の文で「曙」が見えた後に、寝覚の上の詠んだ和歌では「朝ぼらけ」が用いられている。一方で、寝覚の上と時間・場所を共有する宰相の上の和歌では「曙」が用いられている。同じ時間に詠まれた歌の一方に「あさぼらけ」、もう一方に「あけぼの」が詠み込まれていることは、両語の時間的差違が無いことを端的に表す。

この二首は心中歌と解される¹⁶。ただ、両歌には対応する語句が含まれているため、贈答歌ではなくとも二首の重なり・ずらしに関しては作者の意図が存在するとも解釈できる。しかし、同じ場所と同じ時間に詠まれていることから、「あさぼらけ」と「あけぼの」に贈答歌によく見られる「ずらし」が存在していたとしても、それは時間帯の差ではなく、景物の取り方や置かれた句の用法や運用の違いと言えるだろう。

『夜の寝覚』の散佚部に含まれると考えられ、『風葉和歌集』に収録される次の歌では、詞書に「あさぼらけ」、歌に「あけぼの」が含まれる。これは、吉海氏が言葉の「重なり」の根拠とする用例と同じ形である。

ひろさはにすみ侍りけるころ、あさぼらけのけしきにもみしよのほど思ひ出でられければ

ねざめのひろさはの准后

さき匂ふ花も霞もみやこにて見しながらなる春の曙

（春下・八七番歌）

他にも、詞書に「あけぼの」、歌に「あさぼらけ」が含まれる例がある。

美福門院かくれさせたまひて、御しやりはかうやの御山へわたしたてまつりし御ともにて、くさつといふところより船にのりて、こぎいづるあけぼののそらのけしき、なみのおとまでも、をりしりがほにかなくこえ侍りしかば

あさぼらけこぎゆくあとにきゆるあわの哀まことにうき

世なりけり（『隆信集』哀傷・三三七四番歌）

以上のように、新古今期までも「あさぼらけ」と「あけぼの」の「重なり」と言える用例が複数確認できた。少なくとも和歌において、両語は同様の語義を持つ言葉として交替可能であったと言える。

同場面・同歌における用例以外でも、両語の重なりを見ることができると、時間軸上で考えると、両語が表すと想定される夜明け前後の時間帯は、大きくわけて、真つ暗な時間帯から薄明、空が白んで視界も開けた日の出直前、太陽の光が差し込む日の出後と推移する。その両端である暗い時間帯と日

の出後の時間帯の用例が、両語とも確認できる。

まず暗い時間帯であると確認できる用例として、次の二例が挙げられる。

あかつき月夜にいし山よりいで給ふとてせきのあなたにて月のいらぬさきにうたひとつのたまひければ、ゆきより

相坂の関まで月はてらさなむ杉のむらだち木ぐらからん

といひたれば

ともに行く月なかりせば朝朗春のやまちを誰に問はまし

（『公任集』三三三・三三四番歌）

賀茂歌合、暁山桜

山桜花より外るときは木はありともみえぬ春の明ぼの

（『紫禁和歌集』一一二二番歌）

公任歌の「あさぼらけ」については、「ゆきより」歌に「月はてらさなむ」「木ぐらからん」とあることから、月の光が未だ保たれている暗い時間帯であるとわかる。山桜の「花」以外の「ときは木」は見えないという順徳院歌は、青い葉をつけた木々は暗闇と同化し、白い花だけはかろうじて認知できる程度の暗い時間帯であると解釈できる。両例とも暗い時間帯であり、両語がそういった時間も表せると確認できる用例である。

次に、日の出頃の明るい時間帯と考えられる二例を挙げる。

春十一

春ひさすきしのさざなみいろふかくみえのみわたるあさ
ぼらけかな
〔千穎集〕 一一番歌

おなじとしの雪の朝、大将殿より

人の世はおもひなれたるわかれにて朝日にむかふ雪の明
ぼの
〔拾遺愚草〕 下・雑・無常・二八〇番歌

『千穎集』歌は「春ひさす」とあるので、日の出を迎えた
後の情景を詠んでいると解される。定家歌も「朝日にむかふ」
とあるから、日の出後の情景である。

ここまでに挙げた四例から確認されるように、両語とも暗
い時間帯から明るい時間帯まで使用できる語であった。暗い
「あさぼらけ」も明るい「あさぼらけ」も存在するため、「ア
サボラケは原則暗い」とは言い切れない。「あけぼの」に関
しても同様である。加えて、それぞれが幅広い時間帯を含む
のであるから、どちらが先か後かといった時間差を両語に想
定することも難しい。

次に、視覚的な語彙について両語の違いを確認したい。「見
ゆ」「見る」等の動詞が「ず」等の否定の助詞・助動詞を伴い、
対象物が「見えない」と詠まれていれば、視覚的な「闇」や
「暗さ」を読み取ることもできるだろう。この視覚的な表現に
差が生じていれば、両語の時間的差違や視覚性の違いを裏付
ける根拠となる。

ここで、「見る／見ゆ」＋否定の助詞・助動詞の形で「暗さ」

を詠む代表的な歌を確認したい。

はるのよ梅花をよめる
みつね

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えぬかやはかくる
る
〔古今和歌集〕 春上・四一番歌

「梅花色こそ見えぬ」とあり、梅の花の色が「やみ」によつ
て「見えない」と詠まれている。

「あさぼらけ」詠や「あけぼの」詠にも同様の形が見られ
るが、その構造において上記の例とは異なる点も見出せる。

春

あさぼらけ飛火がくれのいこま山それともみえず春の霞
に
〔壬二集〕 院百首（建保四年）・八〇五番歌

水郷春望満

おほ井川くだすいかだのおとはしてかすみにみえぬあけ
ぼののそら
〔光経集〕 九〇番歌

この二首は、闇や暗さによつて「見えない」のではなく、「霞」
によつて対象物が「見えない」と詠まれている。「見る／見ゆ」
＋否定の助詞・助動詞の形は「あさぼらけ」詠に七例、「あ
けぼの」詠に一五例見られるが、この中で暗さを確認できる
用例は「あけぼの」詠の一例のみであり（前掲『紫禁和歌集』
一一二番歌）、他は全て「霞」や「霧」などの自然現象によつ
て視界が遮られている。

反対に「見る／見ゆ」が否定の助詞・助動詞を伴わない場
合は視覚性が認められ、一定の明るさがあるとも考えられる。

この形は「あさぼらけ」二九例、「あけぼの」六六例が数えられるが、総歌数の差を考えると、⁽²⁾両語に差違があるとは考えにくい。小林氏は「アケボノとアサボラケの違いは、おそらく時間帯を重く見るアサボラケと視角性が強いアケボノといった違いがあったのではと私に推測を述べておく。」（一五三頁）と特に根拠を挙げずに述べているが、「あさぼらけ」と「見る」の結びつきも一定数見られたため、動詞「見る／見ゆ」の調査からは視覚性の違いが確認されなかった。

同場面・同歌での用例や、幅広い時間帯における用例が確認されたことで、両語の時間的順序は存在しないことが明らかになった。また、視覚的語彙に関する調査によつて、両語の視覚性にも差が無いことが確認できた。では、両語の違いはどこにあったのだろうか。次節では両語の字数の違いを鍵として、文字（音節）数に制約のある和歌における運用の実態を確認する。

四、置かれる句と修飾関係の違い…実際の運用に着目して

まず、「あさぼらけ」や「あけぼの」が和歌において置かれる句について調査した（表一）。

表一	初句	二句	三句	四句	五句	計
あさぼらけ	八〇	一	六六	〇	二〇	一六七
あけぼの	一四	一三	七八	一三	五二五	六四三

この結果は、次に引用する、前期院政期頃までの用例を検討した上野辰義氏が指摘する内容と相違しない。「あさぼらけ」における前後の句との修飾関係についても、同様である。

和歌において、「あさぼらけ」の据えられる位置は、初句・第三句・第五句にほぼ限定されているといつてよい。このうち、初句に位置する「あさぼらけ」には、当然連体修飾語がつかないが、第三句に位置するものには、連体修飾語のつかないものと、第二句までの連体修飾語を受けるものがある。第五句におかれているものは、全て連体修飾語を受け、拾えた範囲では、千穎集の「としをへてあれゆくやどのにはくさにとどうづらのなくあさぼらけ」以外は全て、「（連体修飾語）あさぼらけかな」の形で、いずれも山田孝雄博士の言う感動の喚体の句を構成している。

それで、和歌においても、「中略」連体修飾語を受けず、初句・第三句にそのままの姿で用いられた場合は、「中略」時点を示す「に」などを伴わずに、そのままで時点を示していることである。（一〇～一一頁）

「あさぼらけ」が初句・三句に置かれる割合は合計約八七パーセントに上るが、初句も三句も原則五文字（音節）で構成されるため、五文字の「あさぼらけ」は他の助詞・助動詞等を伴うことができない。一方「あけほの」は四文字であるため、どの句に置かれても何かしら別の語を伴うことができる（伴わなければ成立し得ない）。そこで、「あけほの」に後接する語彙について調査を行った（表二）。

句切れ／体言止め	後接する語					初句	二句	三句	四句	五句	計
	助詞以外	その他助詞	は	を	に						
四	〇	〇	二	一	五	二	一	一〇	二	一五〇	一六五
一	六	一	〇	一	三	一	一〇	二	二	一五〇	一六五
一	〇	一	九	五	五二	一	一〇	二	二	一五〇	一六五
〇	五	四	〇	〇	二	一	一〇	二	二	一五〇	一六五
三七四	〇	〇	一	〇	〇	一	一〇	二	二	一五〇	一六五
三八〇	一一	六	一一	七	六二	一	一〇	二	二	一五〇	一六五

初句・三句の「あけほの」における「句切れ／体言止め」の形は、全て間投助詞「や」を伴った「あけほのや」の形である。初句切れの形は『新古今和歌集』四九三番歌（「あけほのや河せの浪のたかせぶねくだすか人の袖の秋ぎり」河霧といふことを・左衛門督通光）が早く、新古今期以後に増加

していく。この場合の「あけほの」は修飾語によって具体化されることはない。一方、詠嘆の形をとる「あさぼらけ」は全て五句における「あさぼらけかな」であり、かつ、ほぼ全ての場合で連体修飾語によって具体化される。「あけほの」は「あさぼらけ」のように詠嘆の助詞「かな」を伴う用例が無く、詠嘆の助詞「や」を伴う用例も全体の割合を見るとかなり少ない。このように、和歌における詠嘆の形に、両語の違いが見られた。

五句の「あけほの」では、「あけほの」が最後の四文字に置かれる体言止めと、助詞「の」を伴う形（「あけほの〇〇」）がほぼ全てを占める。「あけほの」が五句に置かれた場合は、全て「あけほの」か二音節の名詞（例えば「空」「声」等）の体言止めとなる。つまり、五句に詠嘆の助詞を伴って詠嘆の形を作るのは「あさぼらけ」に限られる。

次に、「あさぼらけ」前後の修飾関係について調査した（表三）。比較対象として「あけほの」に関しても調査した（表四）。なお、「修飾を受ける」と判断したのは、次に挙げるように、両語の直前に活用語の連体形が助詞の「の」が置かれた場合である。

冬七首

朝時雨

秋すぎて猶うらめしき朝ぼらけ空行く雲もうち時雨れつ
つ 『拾遺愚草』仁和寺宮五十首・二〇三九番歌

後冷泉院みこのみやと申しける時うへのをのことも
一品宮の女房ともろともにくらのはなをもてあそ
びけるに、故中宮のいではもはべりととききてつかは
しける
源為善朝臣

はなざかりはるのみやまのあけぼのに思ひわするなあき
のゆふぐれ（『後拾遺和歌集』雑五・一一〇二番歌）
また、括弧書きした数は、「あけぼのの○○」の形をとる
用例のうち、四句末に活用語の連体形か助詞「の」が置かれ
た用例と、連体形と終止形が同形となる四段活用の動詞が四
句末に置かれた用例の合計数である。⁽²⁶⁾

表三（あさ ぼらけ）	二句	三句	五句	計
受ける	○	四一	一九	六〇
受けない	一	二五	一	二七

表四（あけ ぼの）	二句	三句	四句	五句	計
受ける	七	七四	○	五〇六 (九八)	五八七
受けない	六	四	一三	一九	四二

どちらでも修飾を受ける場合が多い。「あけぼの」は九

割以上が修飾を受け、特に三句と五句に置かれた場合に修飾
を受けやすい。しかし、三句に置かれた「あさぼらけ」は三
割以上が修飾を受けない。この場合、「あさぼらけ」は前後
の語句との直接的な関係を持たない。例えば次のような形と
なる。

三十七番 右

越前

なみぢよりはるやたつらむあさぼらけかすみぞこゆるす
ゑのまつ山（『千五百番歌合』春一・七四番歌）

一方で、三句の「あけぼの」は約九五パーセントが修飾語
を受ける。散文においては、上野氏が「連体修飾語をもたな
い「あけぼの」が、「見る」という動作の客語になつてい
る」と指摘したように、修飾を受けない「あけぼの」の存在
が認められるが、和歌においては修飾語を必要とした語で
あったことがわかる。また、表二からわかるように、三句の
「あけぼの」は全て助詞を伴う。つまり、三句の「あけぼの」
の大半は、前後の語句との文法的関係を持つている。

以上をまとめると、文字数の違いから、両語には和歌にお
いて取ることのできる形とできない形があり、両語は和歌に
おける役割を互いに補完し合っていたと言える。ここまで述
べたことを表に整理すると次のようになる。

明けたといえる刻限。『源氏物語』では「百千鳥のさへづり」「鳥のさへづり」などの取り合わせが類型的な点で「あけほの」と異なる。」とあり、「あけほの」項に「あさほらけ」より早く、物の色彩が次第に明らかになってくる時間」とある。

(4) 吉海直人「平安朝文学における時間表現考―晝・朝ぼらけ・あけほの・しののめ―」（『源氏物語』の時間表現（二〇〇二年、新典社）、一三七―一六四頁、初出「平安文学における時間表現考―晝・朝ぼらけ・あけほの・しののめ―」（二〇一八年「古代文学研究 第二次」二七号、一三二―四四頁）。本書に収録する段階で、初出論文から多くの用例が追加されている。例えば、初出論文では挙げられていなかった、「あさほらけ」「あけほの」が重なる就直接言える『夜の寝覚』の用例についても、本書で追加されていた。

(5) 堀井令以知氏が既に「アサボラケはアケボノよりも、少しばかり明るくなったところといわれるけれども、もちろん明瞭な区分があるわけではない。これらの語に混同が生じて、アカツキもアケボノもシノノメもアサボラケも同じ空が薄明るくなるころ、東の空に少しばかり明るさが感じられるころについて使われるようになった。」（堀井令以知「ことばの由来」（二〇〇五年、岩波書店）、一六五頁）と指摘していたが、根拠は挙げられていない。

(6) 斎院女房の一人。出自未詳。（天野紀代子ら著『大斎院前の御集全釈 私家集全釈叢書37』（二〇〇九年、風間書房）、六五頁）

(7) 本稿で和歌を引用する際は『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2を用いた。

(8) 詞書は「ほふりにこもりたりしに、あか月にしとみをおしあぐる人の、しかのいとちかくもありけるかなといひしに」。

(9) 小林賢章「アサボラケ考」（二〇二二年『同志社女子大学学術研究年報』六三巻、一五八―一五二頁）

(10) 徳原茂実「朝ぼらけ有明の月と見るまでに」（『百人一首の研究』（二〇一五年、和泉書院）、一八五―一九九頁、初出…同題（一九八三年『武庫川国文』二二二号）、初刊『吉野の山にふれる白雪』（古今和歌集の遠景』（二〇〇五年、和泉書院）、二八九―三〇四頁）。石田論を追従し、加えて「あさほらけ」の語義（明るさ）

に時代的な変遷があったと主張した。しかし、論の根拠となる用例の解釈に矛盾が生じている。

(11) 阿部秋生ら校注・訳『源氏物語』④ 新編日本古典文学全集 23（一九九六年、小学館）

(12) 伊藤夏穂「薫の「朝ぼらけ」詠―音を聞く時―」（二〇一〇年『國學院大學大学院文学研究科論集』三七巻、一一―二三頁）

(13) 本稿における「新古今期」とは、概ね『新古今集』前後の歌人が活躍した頃を指す。具体的には、『新編国歌大観』の検索結果画面で「時代順」に並べた際の「紫禁和歌集」までとする。

(14) 京極派による詠歌には特徴的なものもあったが、一時的に盛り上がった新奇的な表現であると考えられるため、今回は特に取り上げない。

(15) 鈴木一雄校注・訳『夜の寝覚 新編日本古典文学全集28』（一九九六年、小学館）

(16) 「この二首は読解の仕方によっては唱和歌とも贈答歌とも考えうるし、声に出しての独詠とみることでもできるであろう。しかし、歌詠についての反応が全く見られないこと、二人の感動が専ら相手の容姿、人柄に向けてのものであること、二首が春の晝を詠んではいるものの贈答としてみると内容的にも落着きが悪い点

から心中での独詠と解した。ただ、その場合、この一場は心中思惟あるのみということになり、会話は交されたであろうが記されていない。無言劇のような心理のやりとりを描くことを得意とした作者らしい一面と言えそうである。」（石埜敬子「夜の寝覚」の和歌覚書（一九七九年『跡見学園短期大学紀要』一五号、二三～三一頁）、三一頁、注12）

(17) 他に、『金槐和歌集』二二一番歌で詞書に「あけぼの」、和歌に「あさぼらけ」が用いられている。時代は下るが、『風雅和歌集』八六五番歌は詞書に「あさぼらけ」、歌に「あけぼの」が用いられ、『雅有集』五四四番歌と『伏見院御集』一三五番歌は詞書に「あけぼの」、歌に「あさぼらけ」が用いられている。

(18) 二七七六番歌詞書に「三位中将なくなりての秋、ははの思ひにてこもりあたる九月尽日、山座主にたてまつる」とある。この三位中将は藤原公衡のことで、没年は建久四年である（久保田淳『藤原定家全歌集 上』（二〇一七年、筑摩書房）、六二六頁・二六一八番）。

(19) 藤原良経のこと（同注18、六三三頁・二六二九番）。

(20) 同注9、一五三頁

(21) この「見る／見ゆ」には、「〜とぞ見る」「〜と見るまでに」等の見立ての形に含まれる「見る／見ゆ」は含まなかった。見立ての「見る／見ゆ」は「あさぼらけ」詠に八例、「あけぼの」詠に六例確認される。「あさぼらけ」に多く見られるのは、「あさぼらけ」初例である『古今和歌集』三三二番歌「あさぼらけありあけの月と見るまでによしののさとにふれるしらゆき」（やまのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるを見てよめる・坂上これのり）の影響であると考えられる。つまり、両語の用例数の違

いは先例の影響によるものであり、視覚性の違いによるものではない。

(22) 次節「表一」の合計欄参照。

(23) 本稿における用例数の調査は、『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』の語彙検索結果画面で「時代順」に並べた際の、『古今和歌集』から『紫禁和歌集』までの全歌を範囲とした。複数の歌集に収録されている同歌と認められる用例は、一首一例に絞って数えた。

(24) 上野辰義「春はあけぼの」と「春のあけぼの」―枕草子第一段雑考―（二〇〇一年『京都語文』八号、四～二頁）

(25) 例外として、時代は下るが、『嘉元百首』に「みるたびにあはれをこめて山のはのかすまぬ春の明ほのぞなき」（霞・内実・五九九番歌）がある。

(26) これらの場合、連体形の活用語もしくは助詞「の」を伴う名詞が「あけぼの」を修飾するのか、「○○」を修飾するのかを厳密に区別できる用例は少なく、ほとんどが「あけぼの○○」全体を修飾している。また、四段活用の動詞が四句末に置かれた用例についても、その動詞が連体形として五句を修飾するのか、終止形で四句切れとなるのかを一首ずつ判別することも同様に行わなかった。

(27) 同注24、一三頁

（しのはら・みか 本学大学院博士前期課程）